

第187回 全経簿記検定試験 上級 一 会計学一 解説

模範解答・予想配点・解説等は、学校法人高橋学園が独自の見解によって作成しており、検定試験実施機関における本試験の解答並びに出題の意図を保证するものではありません。なお、予告なしにその内容を変更する場合がございます。ご理解いただいたうえで、ご利用ください。

問題1 正誤問題

解答を参照すること。

問題2 貸借対照表の表示

解答を参照すること。

問題3 財務諸表に与える影響

1. 先入先出法から総平均法への変更（仕入価格上昇時）
先入先出法を採用している場合、仕入価格の安いものから払出しを行い、期末商品として計上されるのは仕入価格の高いものから構成される。
総平均法を採用している場合、仕入価格が安いものと高いものが平均化される。
よって、売上原価は増加し、期末商品は減少する。
2. 部分純資産直入法から全部純資産直入法への変更（時価下落時）
部分純資産直入法を採用している場合、評価損は投資有価証券評価損益として損益計算書に計上される。
全部純資産直入法を採用している場合、評価損はその他有価証券評価差額金として貸借対照表に計上される。
よって、損益計算書に計上される評価損は減少するが、その他有価証券として計上される金額はいずれの方法を採用しても時価で表示されるため、変動しない。
3. 定率法から定額法への変更
定率法を採用している場合、初年度には多額の減価償却費が計上される。
定額法を採用している場合、各年度を通じて同額の減価償却費が計上される。
よって、減価償却費の金額は減少し、貸借対照表に計上される備品は増加する。